

兄・小澤征爾とともに

——戦争を越えて、芸術が奏でる平和——

小澤 幹 雄

講師紹介（伊藤貴雄副所長）

最初に私の方から、講師のご紹介をさせていただきます。

小澤幹雄先生は1937年、中国大連生まれ、早稲田大学仏文科を中退後、俳優・放送タレント・エッセイストとして活躍されました。『王様と私』、『風とともに去りぬ』、『放浪記』などの舞台や、NHK大河ドラマ『勝海舟』、『風と雲と虹と』、映画『歌麿 夢と知りせば』などにご出演。『勝海舟』では、ジョン万次郎という、日本人のいわば初の公認通訳、英語通訳である歴史上の人物を演じられました。先ほど伺ったところ、セリフはほとんど英語でトークをされたということです。

テレビ朝日「朝ワイド」の総合司会も務められました。ラジオ番組「小澤幹雄のやわらかクラシック」で好評を博されました。著書に、『松本にブラームスが流れた日——小澤征爾とサイトウ・キネン・オーケストラ』『やわらかな兄 征爾』などがございます。今日、小澤征爾の芸術を語り継ぐ第一人者として、全国を飛び回ってご講演をされていると伺っております。

ここでお兄様の小澤征爾さんのご紹介も合わせてしておきますと、1935年に中国の奉天、現在の瀋陽で生まれました。桐朋学園で指揮者の齋藤秀雄に指揮を学び、フランスに渡航され、ブザンソン国際指揮者コンクールで一位を獲得。ニューヨーク・フィルハーモニックの副指揮者となりました。トロント交響楽団、サンフランシスコ交響楽団の音楽監督などを経て、ボストン交響楽団の音楽監督を29年にわたり務め、2002年にはウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任、セイジ・オザワ松本フェスティバル総監督、小澤征爾音楽塾塾長、小澤国際室内学アカデミー奥志賀理事長、水戸室内管弦楽団総監督等を務められて、昨年2024年にお亡くなりになりました。

ここから小澤幹雄先生に、小澤征爾先生との思い出を通して、また小澤幹雄先生ご自身が、ここまで歩んでこられた人生と芸術への思いを語っていただきたいと思っております。それでは小澤幹雄先生どうぞよろしく願いいたします。

Mikio Ozawa（放送タレント・エッセイスト）

本稿は池田大作記念創価教育研究所主催の講演会（2025年11月3日、於・創価大学S201教室）における講演に加筆修正を施したものである。

小澤幹雄氏講演

I 中国からの引き揚げ

年齢に免じまして、座ってお話をさせていただきます。

私は男ばかり四人兄弟の末っ子です。私のすぐ上が、指揮をしておりました征爾で、その上にさらに二人兄がおります。一番上の兄・克己は、若い頃は音楽をやっておりましたが、大学は東京藝術大学の彫刻科に進み、仏像を制作したり、京都の仏像を研究したりする彫刻家の道歩んでおりました。その兄が音楽好きだったこともあって、私たち弟に音楽を仕込んでくれ、そのおかげで音楽に親しむようになったのだと思いますが、本人は彫刻の道へ進んでいきました。

次の二番目の兄・俊夫は、最初はドイツのグリム童話を研究し、グリム兄弟の研究をしておりました。しかし、柳田國男先生にお目にかかり、いろいろとお話をする中で、「グリム童話もいけれど、日本の昔話もやってくれたまえ」と言われたそうです。それをきっかけに、日本中を回り、その土地に伝わる昔話を発掘する仕事を、柳田先生のご指導のもとで続けてきました。現在も九十代後半ですが、全国に四十カ所、「小澤昔話大学」とでも言うような研究所を作っています。若い頃は日本中を飛び回り、その四十カ所を回って一緒に研究をしておりましたが、最近は何を取って足が悪くなり、動けなくなったため、自宅でインターネットを通じて、全国四十カ所の昔話研究所と交流をしているようです。私たち兄弟の中では、唯一の学者タイプと言える存在です。

このように男ばかり四人兄弟で育ちました。皆さんの中にもいらっしゃるかもしれませんが、女の兄弟がいないというのは、本当に殺風景なもので、子どもの頃には、お姉さんがいたらいいな、妹がいたらいいな、と思ったこともありました。親にしてみれば、三人目くらいで女の子を、という期待もあったようですが、四人目もまた男でしたので、私が生まれたとき、父はがっかりして名前も付けなかったと言います。「もう勝手に付けてこい」と言われたので、母は役場へ歩きながら、何という名前にしようかと考えたそうです。

父は「トラオでも何でもいいから付けろ」と言ったそうですが、私は丑年ですので、丑年でトラオというのもおかしな話です。ちょうどその頃、確かアムステルダム・オリンピックだったと思いますが、日本人で初めて織田幹雄さんという方が三段跳びで優勝され、当時は織田幹雄、織田幹雄と、国民的英雄のように騒がれていたそうです。その影響で、自分の子どもに「幹雄」と名付ける人が非常に多い時代があったらしく、私の世代には「幹雄」という名前がとても多いようです。母も役場へ行く途中で、その「幹雄」という名前を思いついたらしく、そうして私の名前は幹雄になったのだと、後になって聞かされました。名前のことはどうでもいいのですが、そのようにして、男ばかり四人兄弟の中で育ってきました。

私たち四人兄弟は、全員中国で生まれました。一番と二番目の兄は長春、征爾は奉天、そして私は大連です。こうして生まれた場所がばらばらということからも、父がいかに中国各地を転々

としていたかがお分かりいただけると思います。

父（小澤開作）はもともと歯科医で、小澤歯科医院をきちんと開業していたのですが、いわゆる政治運動といいますが、中国には満州青年連盟や新民会など、さまざまな民間の政治団体があり、そうした活動に参加するようになってから、次第にそちらの方にのめり込んでいきました。そして、いつの間にか歯医者の仕事はやめてしまい、政治運動に専念するような状態になり、中国各地を転々としていたようです。

最後は北京に移り、父が建てた家に住んでおりましたが、ご存じのように、次第に日本軍が勢力を伸ばし、中国人民への弾圧が強まっていきました。日華事変も起こり、そうした状況の中で、父は日本軍による中国人民への弾圧を、声高に批判し始めたらしいのです。自ら雑誌を作り、自宅に編集部を構えて、「河北新報」という政治雑誌を発行し、自分が編集長となって、その誌面で日本軍の横暴を激しく批判していたと聞いています。

当然のことながら、日本軍からは目を付けられ、ついに日本軍の憲兵が、朝から晩まで我が家に常駐し、父を監視するような状態になりました。それでも父は筆を折ることなく、活動を続けていたようです。

父の監視に来ていた憲兵は、小山さんという方でした。その小山憲兵は、朝から晩まで我が家において、家族と一緒に食事をし、夜には父と酒を飲んで過ごすうちに、次第に父に感化され、考え方にも共感するようになり、いつの間にか父の子分のような存在になってしまったそうです。その結果、本来の監視という役目を、まったく果たさなくなってしまうらしいのです。

しかもその上、その小山憲兵は、我が家との関わりが深くなりました。母（小澤さくら）は体があまり丈夫ではなく、家族も多く、来客も多かったため、母一人では台所が回らず、父が山梨の田舎から若い女性を二人呼び寄せ、手伝ってもらっていました。そのうちの一人を、小山憲兵が見染めたのかどうか分かりませんが、交際を始め、ついには結婚してしまったのです。しかも、その仲人を務めたのが、うちの両親だったという、何とも不思議な話です。つまり、監視に来ていた憲兵さんが、我が家で結婚式を挙げていたわけです。

私はまだ子どもでしたので、庭で毎日のようにその小山さんに遊んでもらっており、とても懐いていました。まさか父を監視しに来ている憲兵だとは知らず、父の仕事仲間だと思って一緒に遊んでいたのです。その小山さんが、我が家のお手伝いさんと結婚したあと、どうなったのかと、余計な心配ですが、後に聞いた話では、日本軍の中で立場が悪くなり、どこかへ飛ばされてしまったようです。

こうしたこともあって、結果的に父は中国にいられなくなり、日本軍から追放処分を受けることになったらしいのです。父は中国人の友人も多く、中国を深く愛し、いずれは中国に骨を埋めるつもりでいたそうですから、この追放処分は、父にとって非常に大きな挫折だったと思います。不本意ながら、中国を去らざるを得なくなったわけです。

私たちにとっては、その後に戦争が始まり、もし終戦まで中国に残っていたとしたら、満州には日本に帰ることができずに亡くなった日本人が何百万人もいたわけですから、まず生きて帰れ

なかつただろうと思います。そう考えると、結果的には、父の挫折のおかげで、戦前に日本へ戻ることができたという、今から言えば幸運な面もあったのではないかと思います。父にとっては大きな挫折であったと思いますが、昭和十六年の春、慌ただしく、母と私たち四人兄弟は中国から引き揚げ、神戸港に到着しました。父は残務整理のため中国に残り、私たちだけが先に帰国したのです。

神戸港に着いたとき、母は、中国独特の鍋を持ってきました。中央に煙突があり、周囲に肉や野菜を入れて煮るもので、「火の鍋の子」と書いて「火鍋子（ほうこうず）」と言いますが、母はその鍋が大好きで、「これがなければやっていけない」と言い、鍋を抱えて帰ってきたそうです。それに加えて、写真のアルバムです。父はカメラが趣味だったらしく、家族の写真を撮ったアルバムが十冊ほどあり、それをすべて持ってきました。そしてもう一つが、アコーディオンでした。

アコーディオンは、母の話によると、クリスマスか何かの折に、父が上の兄たちに買い与えたものだそうで、とても音色がよく、値段も高かったらしいです。母は、鍋と写真のアルバム、そしてそのアコーディオンを抱えて、神戸港まで来たのだそうです。税関では呆れられたようですが、その三つは、いずれも大いに役立ちました。鍋は毎日の食卓に上がりましたし、アルバムを持ち帰ってくれたおかげで、私たち兄弟の赤ん坊の頃の写真を、今でも見ることができます。中でも一番助かったのは、やはりアコーディオンでした。アコーディオンが一台あったおかげで、私たち四人兄弟は、戦争中のつらい毎日の中で、ほんの少しですが楽しみを持つことができました。

II 立川での戦争体験

母はクリスチャンで、北京の教会に熱心に通っていたそうですから、讃美歌をたくさん覚えていました。その讃美歌を、戦争中の本当に暗い時代に、「私が讃美歌を教えてあげるから、覚えなさい」と言われ、私たち四人兄弟で歌うようになりました。ちょうど四人でしたので、四部合唱です。讃美歌は通常は混声合唱用に、ソプラノ、アルト、テノール、バスという形で編曲されていますが、それを男ばかりの四人兄弟で、毎日、母の指導のもとに歌っていました。

その頃、私はすでに声変わりをしていたと思いますが、不思議なことに、兄たちよりも声が高く、一番上の兄が少し高めの声でした。そのため、一番上の兄がソプラノ、二番目の兄がアルト、征爾がテノール、私がバスという具合に、きれいに四部がそろい、毎日のように讃美歌を歌っていたのを覚えています。

あるとき、私たち四人と、先生役の母を合わせた五人で歌っていた際に、母の音程が少し上ずるといいますか、怪しいところがありました。私も何となく気づいてはいたのですが、征爾があるとき、「お母ちゃんに合わせるのは苦勞するよ」と言ったのです。征爾はその頃から耳がよかったようで、はっきりと母の音程のずれを指摘しました。先生役だった母は驚いたようですが、あとでそのことを笑って話していました。

そんなふうには、戦争中でテレビも何もない時代でしたから、それくらいしか娯楽はなかったのですが、そうした時間はとても楽しいものでした。私たちは立川でそのような生活を送っていました。

立川では、家の前に若草幼稚園があり、そこに私と征爾が通いました。近くには現在の都立立川高校があり、当時は旧制二中と呼ばれていましたが、そこに上の兄二人が通っていました。私と征爾は幼稚園から柴崎小学校へ進み、立川での生活を続けていたわけです。

その頃は、楽しいことなどほとんどなく、戦争中でしたからアメリカの飛行機が飛んできたり、食べるものもなく、本当に苦しく、つらい時代だったと思います。

あまり戦争中の思い出というのは、これまで話したこともありませんし、正直、話したくもありませんでした。しかし、今になって、この歳になって振り返ってみると、あれは本当にすごい体験だったなと思うことがありますので、今日はそのことを少しだけお話しさせていただこうと思います。

太平洋戦争は、昭和十六年に始まり、昭和二十年に終わりました。昭和二十年に入った頃には、日本はもう負け続けて、アメリカの戦闘機が次々と日本にやってくる、爆弾を落とす、そういう時代でした。

立川には郊外に飛行場がありました。現在は昭和記念公園になっているそうですが、当時は日本軍の飛行場でした。そのため、そこを目がけて、アメリカ軍が毎日のように爆弾を落とすにきたのです。そして、そのついでと言っては何ですが、市街地にも次々と爆弾が落とされ、立川の町は半分以上が焼け、爆弾による被害を受けました。亡くなった方も大勢いたわけです。

そのような時の出来事を、少しお話ししてもよろしいでしょうか。

防空壕というものは、皆さんはご存じないかもしれませんが、空襲警報が鳴り、アメリカの戦闘機が上空に来ると、必ず防空壕に入らなければなりません。我が家の庭には、父が掘った、六人家族がやっと入れるほどの、穴蔵のような防空壕があり、そこに家族で入っていました。そして、アメリカ軍の飛行機が飛び去るまで、じっと耐えているわけです。

ところが、あるとき、私と征爾が喉が渇いてしまい、本当は外に出てはいけませんが、「喉が渇いた、水が飲みたい」と母に言いました。すると母が、「今なら大丈夫。上空にアメリカの飛行機はいないから、行ってらっしゃい」と言い、私と征爾は防空壕を出てしまいました。

玄関を通り、裏の台所の前にポンプ井戸がありましたので、そこで二人でガッチャン、ガッチャンと水を汲み、飲むとした、その瞬間でした。雲間から、アメリカのグラマン戦闘機という一人乗りの小型戦闘機が、私と征爾を見つけ、突然、ダダダッと機銃掃射をしてきたのです。脇の畑にババパッと砂煙が上がりました。

私は腰が抜けてしまい、脇の木の下に逃れた記憶があります。母は防空壕から身を乗り出し、「早く帰ってらっしゃい」と叫んでいましたが、私は腰が抜けてしまって、まったく動けませんでした。

た。征爾は落ち着いていたのか、あとで「乗組員の顔が見えた」と言っていました。私にはそんな余裕はまったくありませんでした。敵機が飛び去ったあと、慌てて這うようにして防空壕へ戻りました。本当に恐ろしい体験でした。当時は、こうしたことが日常的に起きており、みんなが似たような経験をしていたのだと思いますが、私にとってはそれが初めてでしたし、まだ小学校二年生だったと思いますので、本当に怖かったことをよく覚えています。

もう一つ、ついでにお話ししますと、B29 という大型爆撃機が、立川の飛行場を目掛けて飛来し、立川の市街地にも爆弾を落としていくのですが、地上から日本軍が迎撃射撃として、バーン、バーンと撃ち上げても、上空を飛んでいるため、なかなか届きません。多くの場合、爆弾はその手前で爆発してしまい、私たちはそれを「ああ、当たらないな」と、毎日のように見ていました。

ところが、あるとき、珍しく B29 に砲撃が命中しました。大型の B29 が真っ赤に燃えながら、私たちの目の前に落ちてきたのです。それだけでも衝撃的でしたが、その後しばらくして、今度は音もなく、落下傘で乗組員がゆっくりと降りてきました。

そこから先は、大変な騒ぎになりました。街の市民たちが集まり、そのアメリカ兵を捕まえ、近くにある立川の諏訪神社へ連れて行きました。私が通っていた柴崎小学校の隣にある神社ですが、その境内の大きな木に、まるでキリストのように縛りつけられ、まだ生きているアメリカ兵に対して、大勢の市民が集まりました。確か、指導する日本の兵隊がいて、「並べ」といった号令をかけ、市民を並ばせたのだと思います。市民たちは、それぞれ鞭や木の棒を手に持ち、縛られたアメリカ兵を、次々に殴りつけ、最後には打ち殺してしまいました。

捕虜を虐待してはいけないということなど、まったく顧みられず、普段は善良な市民であった人たちが、目の前にアメリカ兵が現れた途端、鬼のようになって鞭を振るう、その光景でした。私は近くの木陰に隠れ、震えながら、その一部始終を見ていました。そのアメリカ兵は、GI カットの、二十歳くらいの、白人兵でした。生きて動き、呻いているのが分かりました。それに対して、「こんちきしょう、こんちきしょう」と言いながら、五十人ほどの市民が代わる代わる殴り続け、ついに殺してしまったのです。

あの光景は、私は一生忘れることができません。ただ、あの経験は、忘れよう、忘れようとして、実は最近まで誰にも話さずにきました。ところが、この歳になって、新聞などで「戦後八十年」といった言葉を目にするようになり、「やはり、あの経験は、戦争を知らない若い人たちには知っておいてほしい」と、最近になって思うようになりました。

そうしたこともあって、ついこの間（2025年5月15日）、あるコンサートの機会がありました。バルカン室内管弦楽団という、バルカン半島から来たオーケストラで、柳澤寿男さんという若い指揮者が指揮をされていました。バルカン半島は、かつてユーゴスラビアという国でしたが、チト大統領の死後、国が分裂し、民族間の内戦が続いた地域です。ついこの間まで同じ国民だった人たちが、殺し合うような状況が続いていました。

そのバルカン半島に、日本の若い指揮者である柳澤さんが入り込み、一人一人に「音楽をやろう、オーケストラをやろう」と声をかけ、説得して結成したのが、このバルカン室内管弦楽団です。柳澤さんは音楽監督・指揮者として活動し、この楽団は毎年のように日本を訪れています。

そのコンサートでは、被爆ピアノが使われました。広島で原爆が投下された際、家庭にあったピアノが被爆し、焼け焦げながらも奇跡的に残ったアップライトピアノです。それを、広島の調律師である矢川光則さんが引き取り、弦をすべて張り替え、再び演奏できるようにしたもので、そのピアノを使ってピアノ協奏曲が演奏されました。通常はグランドピアノが置かれるところに、傷だらけの縦型ピアノが中央に置かれ、ピアニストがそれを弾くという、非常に印象的なコンサートでした。

そのとき、柳澤さんから「小澤さん、子どもの頃の戦争体験があるそうですが、それを話してみませんか」と声をかけられ、私は休憩時間に舞台に出て、初めてお客様の前で、今お話ししたような体験を語りました。伊藤貴雄先生がたまたまそれを聞いてくださり、今日もまた話してよいと言ってくださったので、こうしてお話しさせていただいています。

これは、兵隊として戦地に行ったわけでもなく、いわゆる大げさな戦争体験ではありません。ただ、自分の家の庭で起きた、子どもとしての体験です。それでも、私にとっては一生忘れることのできない戦争体験であり、目の前で善良な市民が鬼のようになり、人を打ち殺す光景は、二度とあってほしくないものです。

若い皆さんにも、戦争の愚かさ、怖さというものを、少しでも感じ取っていただきたいと思い、伊藤先生のお許しを得て、今日お話しさせていただきました。ありがとうございました。

Ⅲ ピアノとの出会い

もう少しお話をしてもよろしいでしょうか。先ほどアコーディオンの話をしましたが、その頃に触れた楽器はアコーディオンだけではありませんでした。

近くにあった、現在の立川高校、当時の旧制二中の音楽室に、上の兄が征爾を連れて行き、ピアノの手ほどきをしたそうです。すると征爾は、上達がとても早かったらしく、上の兄が「征爾はどうやらピアノの才能があるみたいだから、本格的にピアノをやらせたいね」と言っていたそうです。その話を小耳に挟んだ父が、ある日突然、「ピアノを買おう」と言い出しました。

当時は戦後間もない時代で、食べるものも十分でない頃ですから、ピアノを習っている子どもなどいませんし、家にピアノがある家庭など、夢のまた夢のような時代でした。それでも父がそう言ってくれたものですから、兄たちは大喜びしました。横浜の親戚の家に、使っていない縦型ピアノがあるという話を聞き、交渉したところ、「売ってあげてもいい」と言われ、それを購入することになりました。

値段を言うのも恥づかしいのですが、いくらだったかという、三千円だったそうです。昭和二十二、三年頃の三千円ですから、当時としては大金だったと思います。父はその三千円を工面するため、趣味で持っていたライカというドイツの高級カメラを売り払って、ようやくお金を作っ

たそうです。

私は、母が晩年に話してくれたことをずっとメモに取り、母の少女時代から晩年までをまとめて、『北京の碧い空を わたしの生きた昭和』という本を角川文庫から出しました。その中で、ピアノの話になったとき、「いくらで買ったの？」と母に聞いたところ、「三万円だったよ」と言われたので、そのまま三万円と書いてしまったのです。ところが本が出てすぐ、横浜の親戚から連絡があり、「そんな高くふっかけませんでしたよ。三千元でしたよ」と言われました。やはり昭和二十三年頃の三千元というのは、それほど大きな金額だったということなのだと思います。

そのピアノがあったのは、横浜の白楽というところの親戚の家でした。そこから立川まで、どうやって運んだかということ、上の兄二人が、立川の二中の学校からリアカーを借り、空のリアカーを押して白楽まで行き、そこにピアノを載せ、縄で縛り、白楽から立川まで三日かけて運んだのです。兄二人は、今で言えば高校生、当時は旧制中学生でした。道はたしか府中街道だったと思いますが、砂利道で、ガタガタと揺れる道だったそうです。一番怖かったのは下り坂で、ピアノが田んぼに落ちそうになり、必死に押さえたと話していました。父も「二人だけでは心配だ」と言って、二日目か三日目の途中から合流し、最終的には三人で我が家まで運んできました。

狭い我が家の玄関にピアノが置かれたときの喜びは、相当なものでした。私はまだ小学校二、三年生でしたから、そのありがたさはよく分かっていませんでしたが、家族は本当に喜んでいました。征爾は「ドミソ」と音を出して、「きれいだね」と言っていました。考えてみれば、砂利道を三日間、ガタガタと運んできたピアノですから、調律もされていませんし、きれいな音が出るはずはないのですが、それでも「ピアノが家に来た」という喜びの中で、征爾が「ドミソ」を弾いて「きれいだね」と言ったことを、私はよく覚えています。

当時、自分の家にピアノがある家庭など、ほとんどなかったと思います。そんな貧乏な我が家にピアノが来て、征爾は朝から晩まで弾いていました。上の兄も弾いてはいましたが、ほとんど征爾が一人で弾いているような状態でした。

私が覚えているのは、柴崎小学校で、征爾が五年生のときの学芸会で、ベートーヴェンの「エリーゼのために」を弾いたことです。それが、征爾にとって人前でピアノを弾いた、デビューだったのではないかと思います。なぜそのことをよく覚えているかということ、その学芸会の日、私たち三年生は、講堂の雑巾掛けを命じられ、クラス全員で雑巾を持って講堂に行き、床をきれいに拭いていたからです。そのとき、舞台の上で、征爾が一人で「エリーゼのために」を弾き続けていたのを、私は覚えているのです。そんな出来事がありました。それが、立川での、本当に戦後間もない頃の話です。

立川の町は、戦後アメリカ軍が来て、郊外の飛行場は占領され、今の沖縄のように、町中がアメリカ兵であふれ、治安も悪く、とても住みにくい状態になりました。父も、アメリカ兵にホルドアップされ、ポケットの中のお金をすべて取られたことがありました。「ノー」と言えば撃たれてしまいますから、何も言えなかったのだと思います。

私の記憶にあるのは、立川のアメリカ兵たちは、気前がいいのかどうか分かりませんが、ガムやチョコレートを食べながら、それを私たち子どもに投げてよこすことがありました。それは彼らなりの好意だったのかもしれませんが、私たちにとっては、とても屈辱的なことでした。菌形をついたようなチョコレートを投げられ、それを子どもたちが拾って食べる。あれは本当に屈辱的でした。今でも私は、アメリカのハーシーズのチョコレートは食べません。それほど、強く印象に残っています。

そんな時代の立川でしたので、父は「もう立川には住めない。田舎へ行って百姓をやろう」と言い出し、家族全員で、神奈川県足柄上郡金田村へ引っ越しました。小田急線の新松田駅から、ずっと歩いて行く、田んぼばかりの村です。

私と征爾は、田んぼ道を歩いて村の小学校へ通い、兄は、県立小田原高校へ通っていました。小田原までは小田急線で十分か十五分ほどでした。小学校時代のことは、あまりはっきり覚えていませんが、征爾が六年生のとき、小学校には音楽の先生がいまませんでしたので、音楽の時間になると、征爾がオルガンを弾き、授業をしていたことがありました。

あるとき、私が廊下を通ると、教室から征爾のオルガンの音が聞こえてきました。何をしているのかと思つてのぞいてみると、先生がいなくて、征爾がオルガンを弾きながら、同級生たちに音楽を教えていたのです。戦後で先生も足りない時代でしたから、田舎では、オルガンが弾ける子どもなど、ほとんどいなかったのだと思います。

IV 成城学園時代

それで、征爾が田舎の小学校を卒業することになり、「どこか良い学校はないだろうか」という話になりました。当時、我が家の家計は本当に貧乏のどん底で、小さな畑と、母は内職で毛糸のネクタイを編んで売ったり、魚の行商をしたりして、何とか暮らしている状態でした。父は、医者に戻ればいいのに、「俺はもう絶対に医者には戻らない」と言い張り、会社を始めては倒産し、借金ばかり増えていくような状況でした。

貧乏話をするのは好きではありませんが、それでも母は、「学校だけは、良いところへ行かせたい」と思ってくれたのだと思います。小田急沿線で学校を探し、征爾のために調べたそうです。すると、玉川学園と成城学園があることが分かりました。まず玉川学園を訪ねると、「我が校は一貫教育で、幼稚園から大学までずっと通っていただかなければなりません」と言われました。そのとき母は、「もしかしたら征爾は音楽の道に進むかもしれない。それなら、この学校は少し無理かもしれない」と思ったそうです。

そこで成城学園に行つて、同じ質問をしたところ、「全くかまいません。入りたいときに入つて、出たいときに出てくださいと結構です」と言われ、「それなら、ここにしましょう」と決めて、征爾は成城学園に入ることになりました。もちろん入学試験はあったのですが、当時は戦後間もない時代で、今のような厳しい試験はなかったようです。私もその二年後に成城学園に入りましたが、試験らしいものはなく、校長先生との面接だけで入学したような記憶があります。

征爾は、小田急線で二時間以上かかる新松田から成城学園まで、毎日通っていましたが、それを苦にすることもなく、朝六時頃には起きて、喜んで通学していました。成城学園は、音楽がとても盛んな学校で、戦前から成城合唱団があり、室内楽なども行われていました。征爾は後年、「成城に行かなかったら、オレは音楽家にも指揮者にもなっていなかった」と言っていました。確かにそれだけの環境があったと思います。

戦前から旧制成城高校があり、その卒業生たちが男声合唱団「コーロ・カステロ」を作り、ロシア民謡や黒人霊歌を歌っていました。そのハーモニーが実に素晴らしく、私はそれを聴いて、「自分もコーラスをやりたい」とあこがれたほどでした。

征爾は、合唱の経験などまったくなかったにもかかわらず、その「コーロ・カステロ」の練習場に行って、「僕はピアノが弾けますから、入れてください」と言ったそうです。中学三年生の征爾が、大先輩ばかりの合唱団に入れてもらい、歌うことになりました。しかし、征爾にとって合唱は生まれて初めての経験でした。

その合唱団で、河津祐光^{スケアキ}さんという指揮者のもとで練習をする中で、征爾は、「指揮によって音楽が変わっていく」ということを、歌いながら初めて体験したそうです。河津さんは、旧制高校の卒業生でアマチュアの指揮者でしたが、当時は確か東大生だったと思います。その指揮によって音楽が変化していくのを体感し、「指揮というのは面白いな」と思うようになったようです。とはいえ、大先輩ばかりの中で、「自分にも振らせてください」と言えるはずありません。そこで、私が中学一年生で入学したとき、征爾は親しい中学生だけに声をかけ、中学生だけの新しい合唱団を作りました。仲間は二十人ほど集まりました。この写真が、その合唱団「城の音」の最初の頃の写真です。一番左が征爾、二列目の一番右が私です。私は中学一年生で、征爾は中学三年生でした。女の子のほうが多い編成でした。

合唱団はできたものの、征爾は指揮の経験がありません。そこで練習に行く前、小田原高校で散々コーラスをやっていた上の兄に、「兄ちゃん！ 三拍子はどうやって振るの？」と聞いたそうです。兄から、三拍子はこう、四拍子はこう、と教わり、それで練習に臨んだと聞いています。そうして、征爾はこの合唱団で、初めて指揮というものを経験しました。

この経験は、征爾にとってとても大きな意味を持ったと思いますし、私たちはこの合唱団で、ずっと歌い続けてきました。実は、今でも歌っているのです。何を歌っていたかと言いますと、先ほども申し上げましたが、母からたくさんの讃美歌を教わっていて、何十曲もの讃美歌を暗唱できるほどでしたので、征爾は「讃美歌をやろう」と言いました。団員の中にクリスチャンは一人もいませんでしたが、みんなそれぞれ家から讃美歌集を持ち寄り、ひたすら讃美歌を歌っていました。

最初は名前もなく、「讃美歌ばかり歌っているグループ」ということで、「讃美歌グループ」などと呼ばれていましたが、三年目くらいから、讃美歌以外にも民謡などを歌うようになり、正式に合唱団の名前を付けようということになりました。そこで考えたのが、「城のおと」と書いて「しろのね」という名前です。この「城の音」は、創立から七十年を超え、今でも歌い続けています。

普段はコンサートなどは行いませんが、クリスマスになると、学校の教室でクリスマスコンサートを開き、讃美歌を歌ってきました。若い頃には、キャンドルを手に持って、成城の街を真っ暗な中、讃美歌を歌いながら歩いたこともあります。本当に元気な時代でした。夜が明けるまで歌い続け、駅前の交番のお巡りさんに、「君たち、何をやっているんだ。早く家に帰りなさい」と叱られたこともありました。

そんなふうにして、「城の音」は長くコーラスを続けてきました。征爾にとっては、自分が作った原点の合唱団ですから、指揮者として忙しくなり、海外に出るようになってからも、必ずクリスマスには戻ってきて、私たちの合唱団を指揮してくれていました。とにかくそんな中学時代だったのです。

今日は、私の話だけではあまり面白くないだろうと思い、古い映像をご覧いただこうと考えております。今あらためて見てみると、なかなか面白いものです。

森進一さんと小澤征爾が特別に親しかったわけではありませんが、征爾が森進一さんのファンだったんです。それで、「オーケストラがやってきた」という番組がありましたが、その番組に森さんをゲストとしてお招きし、征爾が「新日フィル（新日本フィルハーモニー交響楽団）」を指揮したことがありました。そのときの映像です。

（ここで、小澤征爾氏と歌手・森進一氏が、音楽における「感情の表出」をめぐる対話した映像が流された。小澤氏は、西洋音楽におけるビブラートの技法と、森氏の歌唱に見られる声の揺れを比較し、両者には表面的な類似性がある一方で、本質的には異なる表現原理があるのではないかという見解を示す。西洋音楽では音程を保ったまま強弱や響きを変化させるのに対し、森氏の歌唱では感情の高まりに応じて音そのものが変化するように聴こえる点が指摘され、そこに文化的背景の違いが関係している可能性が示唆された。これに対し森氏は、歌唱中に自分自身はそのような変化を意識的に操作しているわけではなく、その場の感情に即して自然に生じているものであると答えた。小澤氏はこの点に深い感銘を受け、西洋音楽における理論先行の姿勢と対比しながら、感情が直接リズムや音に現れる森氏の表現のあり方から多くを学んだと振り返っている。）

このときのことはよく覚えています。森進一さんが歌ったのは「襟裳岬」ですね。発表された当時、地元の襟裳岬では、「こんな歌を歌われたら、誰も観光客が来なくなるんじゃないか」と言われたそうです。というのも、歌詞の中に「何もありません」という一節があるでしょう。ところが、この歌がヒットしてから、逆に観光客が殺到したという話を聞きました。

私は森進一さんが大好きで、実は一度だけ、電車の中で偶然お見かけしたことがあります。声が聞こえてきて、「あ、この声は、いつも耳にしている声だな」と思って振り向いたら、森進一さんが乗っておられたんです。直接お会いしたわけではありませんが、そんなことが一度ありました。

V 音楽の師・齋藤秀雄

とにかく、うちの兄は、最初から指揮者になろうと思っていたわけではありませんでした。もともとはピアニストを目指して、ピアノの勉強をしていたのです。ところが、先ほども少し触れた成城学園ですが、音楽が盛んな一方でラグビーも非常に盛んな学校でした。松尾三兄弟という名選手が出たほどで、征爾の同級生に松尾さんの一番下の弟さんがいて、彼に征爾は誘われてラグビー部に入ったのです。

征爾はラグビーにすっかり夢中になってしまい、毎日毎日、泥だらけになって練習をしていました。母は「ラグビーだけは指を怪我するからやめなさい」と言っていたのですが、征爾はすっかりはまってしまってやめられず、母には「もうやめた」と嘘をついて、ジャージやスパイクは学校に置いたまま、家では「やっていない」という顔をしていたそうです。

ところが、とうとう大事な試合で、指を骨折し、さらに鼻の骨まで折るという大怪我をしてしまいました。これではラグビーはもちろん、ピアノも弾けません。包帯姿で、当時ピアノを習っていた豊増昇先生という当時日本では有名なピアニストの偉い先生のところへ行き、「もうピアノが弾けなくなりました」と話したところ、先生が「小澤くん、ピアノだけが音楽じゃないよ。指揮というのもあるよ」と運命の一言をおっしゃったそうです。

征爾は、それまで指揮者になろうなどは、夢にも思っていなかったのです。その言葉を聞いて家に帰り、母に相談すると、「指揮だったら、親戚に齋藤秀雄という指揮者がいるよ」と初めて聞かされました。齋藤秀雄先生は、母とははとこ同士で、はとこっていうのはおじいさんとおばあさんが兄弟なんですから。それで母は以前から齋藤先生のことを知っていたのです。

征爾は、そんな立派な指揮者が親戚にいることを、それまで全く知りませんでした。そして、その話を聞いた翌日だったと思いますが、麴町にある齋藤先生のお宅を、一人で訪ねたそうです。「親戚の者ですが、指揮を教えてください」と突然訪ねてきたので、先生もさぞ驚かれたと思います。しかし、話をよく聞いてくださり、「今、新しい音楽学校、高校を作る予定だ。それが来年できるから、そこに入って来なさい」と言われたのです。

その翌年、京王線の仙川にあった桐朋学園女子高校の校舎の一部を間借りして、齋藤先生が桐朋学園音楽科を創設されました。征爾は、その第一期生として入学することになったわけです。そのため、成城学園の高校にとりあえず進学し、高校一年で中退し、新しくできた桐朋学園女子高校音楽科（音楽科のみ共学）に入り直しました。

こうして齋藤先生の指導を受けることになったのですが、その指導は、いわゆるスパルタ教育などという言葉では済まないほど、非常に厳しいものでした。弟子たちは全員、自宅に呼ばれて個人レッスンを受けます。ピアノでも、ヴァイオリンでも、指揮でも、とにかく一対一で徹底的に教え込まれる。暴力を振るうわけではありませんが、指揮棒で腕を叩かれたり、眼鏡を床に叩きつけられたり、そういう厳しさがあったそうです。

指揮のレッスンには、山本直純さんと征爾の二人一組で行われました。一人が指揮を振り、も

う一人がそれを見ながらピアノを弾く。そこを齋藤先生が指導する、という形式です。その厳しさに耐えかねて、二人が裸足のまま庭から飛び出して逃げ出したことがあった、という話も聞いています。そのあとを奥様が靴を持って追いかけてきたそうです。

それほど厳しいレッスンが続いたものですから、征爾はその恐怖が家に帰っても消えず、玄関先で靴も脱がずに、先生に叱られたことを泣いていたこともあります。あまりの緊張で、家の戸棚が何かを叩き壊して、血だらけになったこともありました。

しかし、そうした厳しい指導があったからこそ、一人前の指揮者になれたのだと思います。齋藤先生に教わったチェロの弟子や、その他多くの教え子たちは、皆そろって「今の自分があるのは齋藤先生のおかげだ」と言っています。

ご存じの方も多いと思いますが、先生が亡くなられて10年後、教え子たちが世界中から集まって「サイトウ・キネン・オーケストラ」を結成しました。そして長野県松本市で、「サイトウ・キネン・フェスティバル」という音楽祭が、1992年から始まり、今もなお続いております。

本当に、弟子たちは皆、口をそろえて「先生は怖かったけれども、先生がいたからこそ今の自分がある」と言っています。実際、世界各地で活躍している音楽家たちが、自分の仕事を休んでも松本に集まり、「音楽祭をやろう」と協力してくれるのです。ヨーロッパのオーケストラで演奏している人たちも、その期間だけは仕事を休んで帰ってきます。

この音楽祭では、オーケストラの演奏だけでなく、オペラも上演しており、その両方を続けて行っています。もっとも、最初に松本で「サイトウ・キネン音楽祭」を始めた頃は、市民から「サイトウ・キネンなんて知らない、有馬記念なら知っているけど」などと言われたことがありました。

しかし今では、松本市民の皆さんはサイトウ・キネンをよく理解し、心から支えてくださっています。多くの方がボランティアとして参加し、市全体がサイトウ・キネン・フェスティバルを中心に一つにまとまっている、そんな雰囲気があります。もしご興味のある方がいらっしゃいましたら、ぜひ一度松本まで足を運んでいただきたいと思います。

最近、フェスティバルの名称は「セイジ・オザワ 松本フェスティバル」に変更されました。征爾本人は変えなくてもいいと遠慮したそうですが、フェスティバルの名称は変わっても、オーケストラの名前は今も変わらず「サイトウ・キネン・オーケストラ」のまま続いています。

では、なぜこれほど大きな成功を取めたのかと言いますと、齋藤先生が学生時代から「今は分からなくても、私の言うとおりに学べば、将来必ずヨーロッパでも通用する音楽家になれる」とおっしゃっていたそうです。当時は半信半疑で勉強していた弟子たちも、その言葉が本当だったのかどうかを確かめたい、実験しようという思いから、先生の没後10年を機に集まり、サイトウ・キネン・オーケストラを結成しました。

そしてヨーロッパ・ツアーを行ったところ、それが大成功を取め、ヨーロッパ各地で非常に高い評価を受けたのです。そこで初めて、「先生のおっしゃっていたことは本当だった」「かつては

ヨーロッパに比べてはるかにレベルが低いと言われていた日本の音楽が、ここまで成長した」ということが証明されたわけです。

その成果として、フェスティバルは今も続いていますし、今では逆に、ヨーロッパの世界的な音楽家たちが「松本に行ってフェスティバルに出演したい」と思ってくれるようになりました。世界的な歌手や指揮者が、出演することを名誉と感じて松本に集まってくる。そうした状況が、今も続いています。それは本当に、ありがたいことだと思っています。

Ⅵ ヨーロッパで指揮者としてデビュー

征爾が桐朋学園を卒業する段階になったとき、齋藤先生は「お前だけは、まだ卒業させられない」とおっしゃったそうです。理由としては、「まだ教えることがある」「ベートーヴェンの『第九』をまだ教えていない」など、いろいろな説明があったそうですが、結局征爾だけが留年となり、卒業を許されませんでした。同級生たちは次々と卒業してヨーロッパなどへ渡っていく中で、征爾は桐朋学園に残り、助手のような立場で齋藤先生のもとで働き、学生オーケストラの世話をする日々を送っていました。

それでも、どうしても海外で学びたいという思いは捨てきれず、まずフランス政府の音楽留学試験を受けました。この試験に合格すれば、フランス政府から奨学金が支給される仕組みでしたが、残念ながらフランス語がほとんどできなかったため、不合格となってしまいました。それでも征爾は諦めませんでした。どうしてもフランスへ行きたいという強い思いから、ヨーロッパまで向かう貨物船に無賃で乗せてもらえないかと交渉をし、さらにマルセイユからパリまではスクーターで行けると考え、富士重工を訪ねて「ラビット・スクーター」を一台譲り受けたのです。本人は「もらった」と言っていました。会社のほうは「貸した」と言っていました。実際には新品を提供してもらい、そのスクーターを貨物船に積んで神戸港を出港しました。

今では考えられない話ですが、当時は飛行機に乗るお金もなく、それ以外に方法がなかったのです。今の学生にこの話をすると、「なぜ飛行機で行かなかったのですか」と聞かれますが、当時は今のように夏休みに気軽に海外へ行く、ヨーロッパの音楽学校の講習を受けて飛行機で帰ってくるなどという時代ではありませんでした。私は、征爾が神戸で船に乗るといので、東京駅で見送った記憶があります。そうして、ようやくフランスに到着し、マルセイユからパリまでスクーターで一週間ほどかけて向かいました。

パリに着いて国立音楽院を訪れたところ、掲示板に「ブザンソン国際指揮者コンクール募集」というポスターが貼ってあったそうです。フランス語だったため内容がよく分からず、読んでもらったところ、「自分も受けられる」ということが分かりました。しかし、受けようと考えているうちに、なんと応募の締め切りが過ぎてしまっていたのです。

それでも征爾は諦めず、日本大使館を訪ねて何とかならないかと相談しましたが、相手にされず、門前払いだったそうです。汚れたジーンズにヘルメット姿でスクーターに乗った若者が突然

現れたのでは、無理もなかったのかもしれない。

ところが征爾はさらに諦めず、今度はアメリカ大使館を訪ねました。アメリカ人でもないのに、です。すると、受付にいたアメリカ人の女性が非常に親切で、征爾の話を丁寧に聞き、「それなら私が電話して聞いてみましょう」と、ブザンソンに長距離電話をかけてくれました。「今、日本人の若い指揮者が来ているのですが、締め切りは過ぎていますが、特別に受けさせてもらえませんか」と頼んでくれたのです。それがOKだったんです。締め切りが過ぎてしまったのに征爾だけ特別に受付してもらえました。彼は急いで課題曲を勉強し、汽車に乗ってブザンソンへ向かい、コンクールを受験しました。そして、そのコンクールで見事に優勝したのです。このとき力になってくださったアメリカ大使館の女性、マダム・ド・カッサは、征爾にとってまさに恩人でした。征爾が後に有名になり、パリでデビューした際には、「セイジ・オザワを世に出したのは私よ」と言って楽屋を訪ねてきたそうです。若い頃は音楽家だったそうで、音楽への深い理解があった方だったのだと思います。

当時は、日本ではブザンソンに指揮者コンクールがあること自体、ほとんど知られていませんでした。征爾自身も、現地に着いてポスターを見て初めて知ったほどです。それが今では、日本や世界中の音楽学校の指揮科の学生たちが、ブザンソンを目標に勉強する時代になりました。今年も、若い日本人指揮者・米田覚士さんが優勝しましたが、征爾が優勝したのは日本人として初めてでした。その後、現在までに11人の日本人指揮者が優勝しています。日本の音楽水準が大きく向上したことを、歴史として実感させられます。このように、征爾のデビューに至るまでの道のりは、紆余曲折の連続で、今では信じられないような出来事ばかりでした。しかし、そうした数々の中で、なんとか世界デビューができたわけです。

しかし、ヨーロッパでデビューしたばかりの頃、現地の新聞記者や音楽評論家から、こんなことを言われたそうです。「あなたは日本人なのに、よくベートーヴェンが分かりますね」「日本人なのに、よくバッハが分かりますね」と。表向きは褒め言葉のように聞こえるのですが、その裏には、「本当は分かっているだろう」という差別的なニュアンスが含まれていたと言っていました。

そうした言葉を一度や二度ではなく、何人もの人から、しかも一年、二年と繰り返し受けたそうです。本人はあまり多くを語りませんが、それを乗り越えるためには、人一倍勉強をしなければならなかったのだと思いますし、デビューするまでの道のりは本当に大変だったのだと思います。

そうした中で、ベルリン・フィルのヘルベルト・フォン・カラヤンが征爾を弟子として迎え、レッスンを受けるようになります。また、アメリカでは、当時ニューヨーク・フィルハーモニックの指揮者だったレナード・バーンスタインから、「うちのオーケストラの副指揮者にならないか」と声をかけられ、アメリカへ渡ってニューヨーク・フィルで仕事をするようになります。そうして、少しずつ指揮者としての仕事が増えていったのです。

VII 世界のオザワとして

ただし、良いことばかりが続いたわけではありません。あまり知られていないかもしれませんが、当時、征爾は一度日本に戻り、NHK 交響楽団の指揮者に就任しています。しかし、NHK 交響楽団は、東京藝術大学を卒業した超エリートの集団ですから、「出来たばかりの桐朋学園出身の、若い指揮者に振られるのはたまらない」といった空気があったようです。今で言えば「いじめ」に近い状況だったのかもしれません。当時はまだ「いじめ」という言葉はありませんでしたが、結果として、「小澤の指揮では演奏できない」として、演奏会がボイコットされてしまいました。

それが、年末の「第九」の演奏会でした。いわゆる「N 響事件」と呼ばれる出来事で、社会面でもスキャンダルとして報道され、「生意気だ」などとマスコミからも激しく叩かれました。この事件をきっかけに、征爾は「もう日本では指揮ができない」と感じ、アメリカへ渡ることになります。「二度と日本ではできない」と、アメリカに向かったのです。

ところが、アメリカに渡ったからといって、すぐに仕事があるわけではありません。ニューヨークの安いアパートで、マネージャーからの連絡を待つ日々が続きました。そんなある日、ロナルド・ウィルフォードというマネージャーから電話がかかってきました。シカゴ交響楽団で、一週間後に予定されていた演奏会の指揮者が病気で倒れてしまい、急きょ代役を探しているというのです。

シカゴ交響楽団のマネージャーが征爾のマネージャーのもとに電話をかけ、「誰か空いている指揮者はいないか」と聞いてきました。そこで、「今、空いているのは日本人の若い指揮者が一人いる」と伝えたところ、「日本人？それは勘弁してくれ」と言われ、電話を切られてしまったそうです。

ところが、しばらくして再び電話がかかってきました。「もう他に誰もいない。その日本人でもいいから、そいつをよこしてくれ」と。そう言われて、征爾はマネージャーから「今すぐシカゴへ飛べ。曲目はこれと、これだ。きちんと振ってこい。このコンサートが成功するかどうかで、お前の指揮者人生が決まるぞ」と送り出されました。

そのとき征爾は、「シカゴと聞いても、アメリカのどこにあるかも分からなかった。ギャングしか思い浮かばなかった」と、のんきなことを言っていましたが、とにかくシカゴへ向かい、オーケストラと一日のリハーサルを終えました。すると、「日本人は勘弁してくれ」と言っていたそのマネージャーが征爾のところに来て、「I will give you this orchestra」と言ったそうです。つまり、「このオーケストラを君にやる」という意味です。

毎年夏に行われる音楽祭の音楽監督を来年から務めてほしいという、大変なオファーを受けました。これはまさに、運命の分かれ目だったと思います。こうして征爾は、シカゴ交響楽団の夏の音楽祭の音楽監督を、五年間務めることになりました。

その後は、カナダのトロントへ渡り、トロント交響楽団の音楽監督を五年間務めました。つい先日、野球のワールドシリーズでは負けてしまったようですが、そうした国際的な舞台での活動

が、さらに続いていくことになります。

その後、征爾はサンフランシスコのオーケストラを指揮するようになり、そして最終的にはボストン交響楽団の音楽監督に就任しました。公式には29年間ということになりますが、その前から夏のタングルウッド音楽祭でボストン交響楽団を振っていましたから、実際には30年以上にわたってボストン交響楽団と関わり続けていたことになります。

ボストンは本当に素晴らしいオーケストラで、街としてもとても魅力的で、征爾自身も「もう辞める気はなかった」と言っていました。契約も期限のないものでした。しかし、ご存じの方も多いかと思いますが、ウィーン国立歌劇場から「音楽監督になってほしい」というオファーを受け、大いに悩んだ末に、「やはりオペラをやらう」と決断し、ボストンを離れることになります。そして2002年、ウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任しました。

その年のお正月、元旦に行われる恒例のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤー・コンサートに初めて出演し、同じ年の秋から、本格的にウィーン国立歌劇場の音楽監督としての仕事を始めることになりました。

齋藤秀雄先生はオペラについては教えてくださらなかったようですが、その後、ヨーロッパで仕事をするようになってから、カラヤン先生から、「オペラをやらなければだめだ」「オペラとオーケストラは車の両輪だ。両方やらなければいけない」「オペラをやらなければ、モーツァルトもヴェルディもワーグナーの半分しか分からない」と、強く言われたそうです。

さらにカラヤン先生は、自分が指揮する予定だったオペラ公演について、「これはお前が振れ」と言って、いきなりチャンスを与えてくれました。それが、ザルツブルクだったと思いますが、そこで指揮したオペラが、征爾にとってのオペラ・デビューでした。それ以降、オペラに深くのめり込み、長年にわたって取り組んできた結果、先ほどお話ししたように、2002年のウィーン国立歌劇場からのオファーへとつながっていったのです。これは本当に良い選択だったと思います。

残念ながら、当初は10年契約だったものが、病気のために7年でウィーンを離れることになりましたが、その7年間、私も何度も現地へ足を運びました。オペラは本当に面白く、引き込まれるものでした。

また、松本で行われている音楽祭でも、オペラを継続して上演するようになりました。松本のオペラは、一般にはあまり知られていない、普段なかなか上演されない作品を取り上げることが多いようですが、それもこの音楽祭の大きな魅力の一つです。

そのような形で、今も活動は続けております。

VIII 再び中国の地に

最後に、最初に申し上げましたように、征爾は中国で生まれたものですから、「どうしても中

国に行って、自分が生まれた中国で、中国のオーケストラと一緒に音楽をしたい」という思いを、ずっと抱き続けていました。

ところが、あの文化大革命の時代には、「西洋音楽は聴くことも演奏することもだめ」という状況が、およそ十年間続いていました。ですから、中国へ行くことも、音楽をすることもできなかったわけです。それでも、その夢だけはずっと持ち続けていました。

やがて文化大革命が終わり、その頃に倉敷レイヨン、今のクラレですね、倉敷に美術館をお持ちの会社があります。あの会社は、日本と中国がまだ正式に国交を結ぶ前から、民間レベルでの交流を続けておられまして、当時の社長さんは中国でも非常に顔の広い方でした。その社長さんにはお嬢さんがいらして、その方がテレビ番組制作会社のテレビマンユニオンで音楽番組を制作されているプロデューサーだったんです。れいこさんという方ですが、その方がお父様のつてを使って、「小澤さんが中国で音楽会をやりたがっている」という話を、ずっと中国側に伝えてくださっていたんですね。

その結果、北京中央楽団という北京のオーケストラと連絡が取れるようになり、1978年、初めて北京でオーケストラを指揮することが実現しました。そのときは、私たち家族も全員で中国へ行きました。

念願かなって、征爾はそのオーケストラを前にした、最初のリハーサルのときに、「音楽家になって、今日が一番うれしい」と言って、涙をぬぐって指揮を始めたんです。それほどまでに、ずっと中国のことを思い続けていたわけです。そのコンサートは本当に大成功でした。

その後、北京の市内には、私たちがかつて住んでいた家が今も残っているということが分かりまして、もちろん別の方が住んでおられましたが、「せめて門の前だけでも見てみよう」ということで行ってみました。そうしたら、車の音を聞いて、中に住んでいる方々が一斉に出てこられたんです。そこで、「実は、ここに昔住んでいた日本人なんです」と話しますと、「昨日テレビで見たシャオツォだ」と言われまして。「小澤」は中国語で「シャオツォ」と言うんですね。「昨日テレビで指揮していたシャオツォだ」と大騒ぎになりまして、「入れ、入れ」と言ってくださり、とうとう家の中まで入れていただきました。まさか昔の自分たちの家に入れるとは思っていませんでしたので、非常に感激的なひとときでした。

それがきっかけとなって、その後、征爾はほぼ毎年のように中国を訪れるようになりました。そして、自分が生まれた瀋陽という、北の地方の町にもオーケストラがあることが分かり、「それなら、そこも振ろう」と言って、瀋陽へ行き、瀋陽のオーケストラを指揮したこともありました。このように、中国との縁は、その後もずっと続いております。

そのときのことがアナザーストーリーズの番組「小澤征爾 悲願のタクト～北京に流れたプログラム」で取り上げていただきましたので、少しご紹介します。

(ここで、指揮者・小澤征爾氏が中国で指揮を行った際の映像が流された。映像では、小澤氏が自らの師である齋藤秀雄氏、ならびに亡父・小澤開作氏の写真を前に、オーケストラを指揮す

る場面が映し出された。映像の背景として語られるのは、日中国交回復を機に実現した中国公演であり、小澤氏にとっては長年の念願であると同時に、特別な思いを伴う出来事であったという点である。家族の証言によれば、小澤氏はこの訪中を、歴史的経緯を踏まえた「謝意」や「省察」を含むものとして受け止めていたとされる。また、同時代の中国の音楽家たちが置かれていた厳しい状況にも触れられ、個人の音楽的感情と、国際関係や文化史という大きな文脈とが交差する場面として、この公演が位置づけられている。）

いや、本当に中国は、文化大革命の影響というか、そのために十年間の空白があって、音楽の発達が遅れてしまったんですね。それは確かに事実だと思います。ただ、今ではもう目覚ましい勢いでレベルが上がっていて、日本を追い越すのではないかと思うほどです。国際コンクールでも中国人が次々と優勝していますし、オーケストラの演奏水準も非常に高くなっています。正直に言えば、日本が追い抜かれている状況にあるのではないかと感じることもあります。

一方で、中国の人たちは日本に対してとても親しみを持っていて感じます。私自身、中国で生まれたということもあって、中国には強い親近感を抱いております。

IX 文化・芸術の力 ～若者へのメッセージ～

ただ、今ふと思い出したことがあります。昨日、ワールドシリーズでアメリカの野球に日本人選手が出場しているのを見て、改めて感じたことがありました。今では日本の選手がアメリカで活躍するのは当たり前のようになっていますが、その道を切り開いたのは、やはり野茂英雄投手だったと思うんです。

野茂投手が、日本の野球界の強い反対を押し切ってアメリカに渡った当時、日本では「アメリカで通用するわけがない」「思い上がりだ」と、非常に冷たい評価を受けていました。それでも野茂投手はそれを乗り越え、渡米初年度から新人王を獲得するなど、見事な活躍をしました。その野茂投手の努力や、断崖絶壁に立たされたような覚悟は、兄・征爾にとっても、強く重なるものがあったのだと思います。

征爾は、ヨーロッパに渡ったばかりの頃、「日本人なのに、よくバツハが分かるな」と言われた経験がありましたが、その言葉の裏にある差別的な空気を、野茂投手も同じように感じていたのではないかと思います。そのためか、兄はよく「野茂投手、野茂投手」と口にしていました。

そして、野茂投手が引退した時のことです。征爾が私に「野茂が引退したな」と言うので、「そうだね」と返すと、「あいつが何て言ったか、知ってるか」と聞かれました。「分からない」と言うと、「『悔いが残る』って言ったんだ」と教えてくれたんです。あれほどの活躍をした野茂投手でさえ、「まだやりたかった」「悔いが残る」と語った。その言葉に、征爾は強く心を打たれていました。

晩年、征爾自身も腰を痛め、思うように体が動かず、指揮ができなくなっていました。周囲からは、「もう十分やり遂げた」「万万歳でもういいじゃないですか」と言われても、本人は「ま

だやりたい」「まだ振りたい」と、最後まで言い続けていました。だからこそ、野茂投手が引退の際に語った気持ちが、よく分かったのだと思います。

昨日の試合を見ながら、改めて「野茂投手は偉大な人だった」と感じましたし、「野茂投手がいたからこそ、今こうして日本人選手がアメリカで活躍できているんだな」と、そんな思いで野球を見ておりました。

以上、雑駁な話で恐縮でしたが、もしご参加の皆さまの中で、何かお聞きになりたいことがございましたら、どうぞご質問ください。

質問（学生） 本日は貴重なお話をありがとうございました。一点、質問させていただきたいと思います。私は将来、「教育」と「芸術」という分野で社会に貢献していきたいと考えております。将来、教員になるかどうかはまだ分かりませんが、少なくとも現時点では、絵を描いたり、音楽を演奏したりといった芸術活動を通して、教育に関わっていきたいと考えています。

ただ、学生としてそのような活動を続ける中で、「自分にとって本当の芸術とは何だろうか」「教育とは何だろうか」といった問いに対して、まだ明確な答えを見いだせずにいます。

これからの人生の中で、ある時ふと「これかもしれない」と思えるような転機が訪れるのか、それとも、どのような気持ちや態度、意識を持ち続けていれば、いずれそうした答えが見えてくるものなのか、その点について先生のお考えをお聞かせいただけましたら幸いです。

小澤幹雄氏 それは、私などが簡単にお答えできるようなことではなく、本当に大きな問いだと思います。ただ一つ申し上げられるとすれば、ご自身が「やりたい」と思うことに、まっしぐらに取り組むこと、それに尽きるのではないのでしょうか。

正直なところ、「こうすべきだ」「こうしたほうがいい」と私から言えるような立場ではありません。しかし、どのようなことがあっても、自分の進みたい道を諦めずに歩み続けることが何より大切だと思います。

この間のノーベル賞受賞者の方も、「周囲から『無理だ』『だめだ』と言われ続けても、最後まで研究の道を諦めなかった」とお話しされていました。やはり、自分が本当にやりたいことを、最後まで諦めずに続けること、それしかないのではないかと思います。

質問（学生） それは、一つの確信というか、いわば「大きな確信」に近いものなののでしょうか。

小澤幹雄氏 そうですね。どうか頑張ってください。実にすごい質問をされましたね。

私もこの年齢ですので、本日は、つい年寄りめいた昔話ばかりしてしまいました。若い皆さんにとっては、あまり実感の湧かない話が多かったかもしれません。ただ、どこか頭の片隅に、「年寄りがこんな話をしていたな」と、ほんの少しでも残していただけましたら、それだ

けで私は嬉しく思います。

戦争体験についても、偉そうに語るつもりはありません。ただ、日本はいま非常に平和な国ですから、皆さんは平和しか知らず、戦争を知らない世代です。だからこそ、戦争を知っている人間の体験を、ほんのわずかでも心の隅に留めていただければと思います。

私は、食べ物のない時代に育ちましたので、食べ物の好き嫌いがありませんし、食べ物を残すということもできません。いまは、言い方は難しいですが、好きなものがいくらでも手に入る時代です。ただ、それを羨ましいとはあまり思いません。子どもの頃に飢えを経験したことは、今でも自分にとって大きな糧になっていると感じています。決して負け惜しみではありません。

皆さんには、現在の物質的な豊かさを大切にしつつも、その「ありがたさ」というものを、ぜひ感じ取っていただければと思います。

ご清聴、ありがとうございました。